

## 1 工程@1円～知的障害者の労働現場

### 24： 施設がもとめる「障害者像」はあるのか？

千葉 晃央

#### ルールと居心地

集団生活にはルールがつきものである。人は学校という場で、そのことを実感することが多いだろう。私は15歳の頃、高校の入学願書を取り寄せたことがありました。そこには髪型に関する校則を伝えるために入れられていた書類がありました。そこには校則に従った髪型をしたモデルの男子学生の写真が掲載されていました。前髪、もみあげなどの長さや形状、そしてパーマの禁止という注意書きが写真の横のスペースに丁寧に書かれていました。今も同じような書面があるのかもしれませんが。その当時、私がみたそこには「テクノカット禁止」と書かれていました。「テクノカット?!」私はその当時その言葉が何を指すのかわかりませんでした。今みたいにインターネットがない時代なので、どこで?誰に?きいていいのやら…。でも、確かにその頃は、「もみあげ」がないのが普通でした。それが坊主頭でも、そうでなくても、それが普通。その頃、大人気のチェッカーズのメンバーも確かに「もみあげ」がありませんでした。もらったその「髪型指示書」の男の子のモデルには…「もみあげ」がありました。そ

こが唯一、まわりの男性の髪型と異なっていました。ですので、どうやらそのことを「テクノカット」というのだということが想像できました。「テクノミュージック」といわれる音楽をしていたYMO(坂本龍一、細野晴臣、高橋幸宏)がその髪型をしていたからかな?と長年思ってきました。今回調べてみて、やはりそういわれているようでした。ルールと言えば、80年代後半の私の学生時代は「テクノカット禁止」という言葉が印象に残っています。「もみあげ」があるなんてとにかくダサかった。中学生でも自分もまわりもテクノカットなのに!…なんでそんなダサい髪型をしなくてはならないのだろう…。とにかく決まりが細かい学校は嫌だ!と思い、私はその学校には進学しませんでした。

#### 「考えない」から「意味を忘れる」

ルールが細かく設定されているという環境では、自分の頭で様々なことを考える機会が減ります。そして、ルールにしたがっていると衝突やトラブルを回避できるという結果を手に入れます。逆にいいすと、

自分の頭で考える機会、そして人との衝突をすることから学ぶ機会を失っていることになります。これはある側面では損失ともいえます。

また、そのルールに関して、自分たちでコントロールができるのか？できないか？という点も大きく居心地というところで影響を与えることは言うまでもありません。

再び、余談ですが私の通っていた中学校は教室も土足でした。下足室というのがありませんでした。いや、私の入学以前数年前まではあったそうです。しかし、それを生徒会の力で、校則の変更を提案し、選挙の結果、廃止にしたそうです。この時期ですと（これを書いていたのは2月）靴箱にチョコが！ということがよくある話です。私がいたところでは、それがありませんで

した。はやく登校して、チョコを好きな男の子の席に行き、その子の机のなかに入れるというのが、結果として起こることでした。それを本人がみつけるのか？友人が見つめるのか？そして、本人が見つけた場合、見つけたことが他の生徒にわかるのか？そのあたりもバレンタインデー後の話題の大きさを左右していました。

### チョコは？

この時期の施設では「バレンタインデー禁止！」ということを決めていることもあります。誰かのことを大切に思うこと、人が人に惹かれること、人が人をすきになることは、人生において欠くこ



とができない要素です。生きる希望になり、そのことしか考えていない時期が人生には多くの人に必ず訪れる。それがあつて健康です。もちろん人によってその時期の過ごし方は様々です。そういうことに興味が少ない方、もしくは興味があるということを出さない方もいますよね。知的な障害をお持ちの方も同じように様々です。

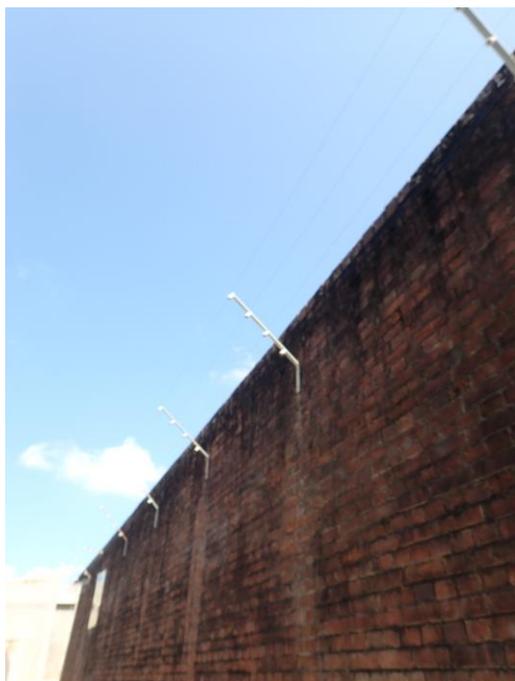
このバレンタインデーの時期にはいろいろなことが起こります。先ずはテレビ等のコマーシャルや、まわりの人の影響もあつてなのではないでしょうか、チョコをあげなければならぬ！と強迫的に思ってしまう方もおられます。そして「義理チョコ」という習慣が、またそれに拍車をかけます。時には施設の利用者全体の半分ぐらいに、チョコをわたした話もありました。すると今度はもらう側の男性の利用者さんも「なぜあの人にはもらえて、私にはないのかな？」とか「私も欲しい！」と思う方も当然おられます。「チョコは？」とたくさんの女性の利用者さんに尋ね回るといふことも…。その尋ねられることに困ってしまう方もおられます。知的な障害を持つ方にとって、このようにあいまいな慣習というのは非常にわかりにくいです。そこにさらに職員にチョコをプレゼントしたい利用者さんがいたり、それを面白くない！と思う利用者さんが間に入って、怒ってしまわれたり。職員はチョコを受け取らないということを決めていることもありました。職員によっては、そういったチョコのやり取りを、他の職員、施設にわからないところで行う…ということも起こって…。こういう事象が混とんとし、その結果とにもかくにも端から「バレンタインデー禁止！」ということに行きつ

いたりするわけです。それはそれで何も起こらず、スムーズです。しかし、味気ないといわれれば味気ないのかもしれませんが。家と施設との往復が毎日のなかでこのようなジャンルの話題がないというのも個人的にはさみしいと思ったりもします。何もかも白黒はっきりするというだけでは人生の様々なことが埋め尽くされないわけです。福祉という人の生活を扱う仕事において、このあたりのテーマをどう扱うかは常に懸案事項です。

### ルールを破ると…

ではバレンタインデー禁止などの施設の決まりを破った場合どのように対応するのか？ということを考えてみたいと思います。決まりに関して、守っているのか？いないのか？ということを考える場合、事実として、実態として遵守しているかどうかで利用者さんをとらえていきます。これが当然基礎になる考え方です。遵守されていない時には、働きかけを行うこととなります。実際、事実があつたのか？なかつたのか？どのような経緯でそういうことになつたのか？そういうことで利得を得るのは誰？で、そのことで得るのは、どういうよろこびなのか？等考えていきます。

私たち援助職は警察や裁判官ではありません。事実の追及だけが私たち福祉職の考え方ではないのです。目の前におられる方の発言を信じ、その利用者さんが語る物語に沿って対応していく。時にはそれが事実とは異なっているようであっても。「ソーシャルワークはプロセスである」という言葉



があったように、事実であったかどうかよりも、この件で実際に利用者さんと話し、かかわっていく過程こそがソーシャルワークであるという側面です。施設でのこういったかかわりは施設ソーシャルワークといわれています。別の言い方ではレジデンシャル・ソーシャルワークといっています。レジデンシャルは「一定の長い期間」という意味が含まれています。支援がある状況の、ある場面でのよりよいかかわりや判断をし、短期的に終わる支援、つまり面接だけとかではなく、何度も時には何年もその場所での支援（ソーシャルワーク）が継続するということが大きな特徴になってきます。

そこでは当然一人の利用者さんに長くかかわることで様々なライフイベントがその利用者さんには起こります。自分の病気、親の病気、さらには親の死…。そういったその人のまわりを取り巻く環境も含めて対象者をとらえていくのが、現在のソーシャ

ルワークの考え方です。楽しい時、うれしい時、苦しい時、悲しい時、厳しい時、体がつらい時にも施設に通い続けるので、さまざまな精神的状態、身体的状態で施設を利用します。時には自暴自棄になりそうだったり、時にはどうしても心の躍動が押えきれなかったり、時には体が苦しくていつもはできているまわりにやさしくすることができなかったり…。

### 100年前の支援

こうしてみると、起こった「事実」を精査して支援をするという方向性だけでは不十分なことは明らかです。事実を扱い、実証主義に基づいた支援の考え方自体は1900年代の初めの頃、つまりソーシャルワークの歴史が始まる頃を起源としています。今から約100年前の考え方です。

この考え方に基づいたエビデンス・ベースド・アプローチは福祉がそれまで経験主義的で、前近代的な考え方へのアンチテーゼとして、重要な援助の姿勢として整理されました。一方では実証主義的な考え方の限界は指摘をされています。実証の根拠となるデータがある尺度からのデータだけに限られていて不十分であること、つまり別の尺度での結果が新しく明らかになることで、根拠が否定できてしまうことが指摘されています。ルールを守ったのか、守っていないのかというような、健康であるのか？そうでないのか？というような二分律、つまり2つのうちのどちらかであるという考え方がこの実証主義の特徴のひとつです。守ったか？守ってないか？は、ひいては施

設にとって理想的な障害者なのか？そうでないのか？というところに集約されていきます。

つまりそれは施設にとっての理想的な障害者像があり、そこに目の前の障害を持った人がはまっているかいないのか。職員はそれにはめ込むことが仕事…？というところ。このように施設にルールがあれば、そこでの期待される障害者の姿は自ずと一定決まっていきかねません。どんな利用者さんもあらかじめ存在する理想の枠に近づけるよう期待される存在になりかねないと。それ自体が少し乱暴ではないのか？それは施設が提供するサービス自体に過剰に画一的な対応があるのではないのか？多くの方を対象に障害者の働く権利を保障する機能を持っているのか？というところになってきます。

### トイレに行っている時間を計る

では、実際に施設のルールに対応していない場面に会った時、どのように対応するのでしょうか。具体的に一言目になんといえますか？「すみませんけど、それは…」「こらっ！」「なにしてんの？」「調子悪そうやね」「大丈夫？」「どないしたん？」「なんかあった？」「なんかあったんちゃう」「なんかしんどいんちゃう」「よっぽど腹が立つことがあったんやね」「ほんま嫌やったんやね」「ストップ ストップ」「…」(黙って近くに立つ)などが浮かんできます。

話しかけるタイミングも相手の視界に自分がいて(つまり、声をかけることで相手がギクッと驚かない)、相手が自分に話しか

けてくるタイミングを生かすのが一つの定番の選択肢です。とはいえ、なかなかそんなタイミングはないので、それに近いタイミングを探します。しかし、起こったその時にすぐ伝える方が伝わるというのも知的障害という特徴から言える側面であることは確かです。そのあたりを総合して判断して行動に移します。

さて、何かしら働きかけました。では次回、障害を持った方が施設の約束を守るという行動の生起を産むでしょうか？この問いをもつことができるのがまず重要です。そして同時に、援助職にはこれからも同じようなことがあっても冷静に対応し続けることが私たち援助職に期待されています。むしろ「こうなさい！」と言われて「はいわかりました！」といい、次回からその行動が起こらないということがなかなかない。そういうところがあるのも人間です。

原因があって結果があるだから、原因を取り除くとそういうことが起こらない。これが実証主義の考え方です。やったか？やっけてないか？が重要な考え方となります。その行き過ぎた例を過去にきいたことがあります。利用者さんがトイレに行くために作業を離れている時間を計測していた事業所(職員のトイレ時間も図っていたそうです)、他にも荷物検査の定例化、防犯カメラ映像でやったかやっけていないかを確認する等いろいろと頭に浮かびます。

### 事実は1つ、真実は複数

基本的には相手が話したことを信じて、対応していくというのが王道であるのが福

祉です。それなのに「話す」ということを大切に、「信じる」ということを大切にすることを、自ら否定する側面がある状況になってしまっているともこれはいえます。

そして、支援では身体化よりは行動化、行動化よりは言語化することが健康と言われている中で、福祉はそれを当然促すことが仕事です。つまりそれは目の前の対象者が発した言葉を信じるところから始まるといえます。

現在の社会福祉士の教科書ではこの実証主義の医学モデルとナラティブモデルと双方の考え方を場面にあわせて行き来できることが重要であるというジェネラリストソーシャルワークが大切だといっています。つまり、ソーシャルワークの考え方は一つでは無理だといっているのです。

家で、例えばこういうことがあって…というナラティブ（物語）があって、その続きで今日は施設でこう過ごしたい！という物語を持ってくる利用者さん。同時に、施設側が求めるこう過ごして欲しいという物語も一定存在します。その施設側のナラティブと利用者さんが持つナラティブが一緒ではないのは当然です。その摺合せ、もしくは融合が起こっていくというのがいいようには思います。

## BACK ISSUES

- 連絡帳 23 2015年12月
- におい 22 2015年9月
- 作業着 21 2015年6月
- 食べる 20 2015年3月
- 通勤 19 2014年12月
- クスリの作用、人の作用 18 2014年9月
- 倫理観でかたづけられる暴力 17 2014年6月
- 触れる 16 2014年3月
- 対談企画「教育と福祉の連携を模索する」2014年3月
- 情報の格差 15 2013年12月
- 20年前のノートから 14 2013年9月
- そうじのねらい 13 2013年6月
- 個別化の暗部 12 2013年3月
- グループワークの視点 11 2012年12月
- 実習生がやってきた！ 10 2012年9月
- 月曜日のせいやな 9 2012年6月
- 所得を決める福祉職？ 8 2012年3月
- 世界とつながる社会福祉現場 7 2011年12月
- この現場へのたどり着き方 6 2011年9月
- 障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会  
2011年9月
- 旅行がない！ 5 2011年6月
- 職員の脳内回路 4 2011年3月
- たかがガムテープ、されどガムテープ 3  
2010年12月
- 利用者が仕事上の戦友 2 2010年9月
- 障害者自立支援法で不景気に！？ 1 2010年6月